

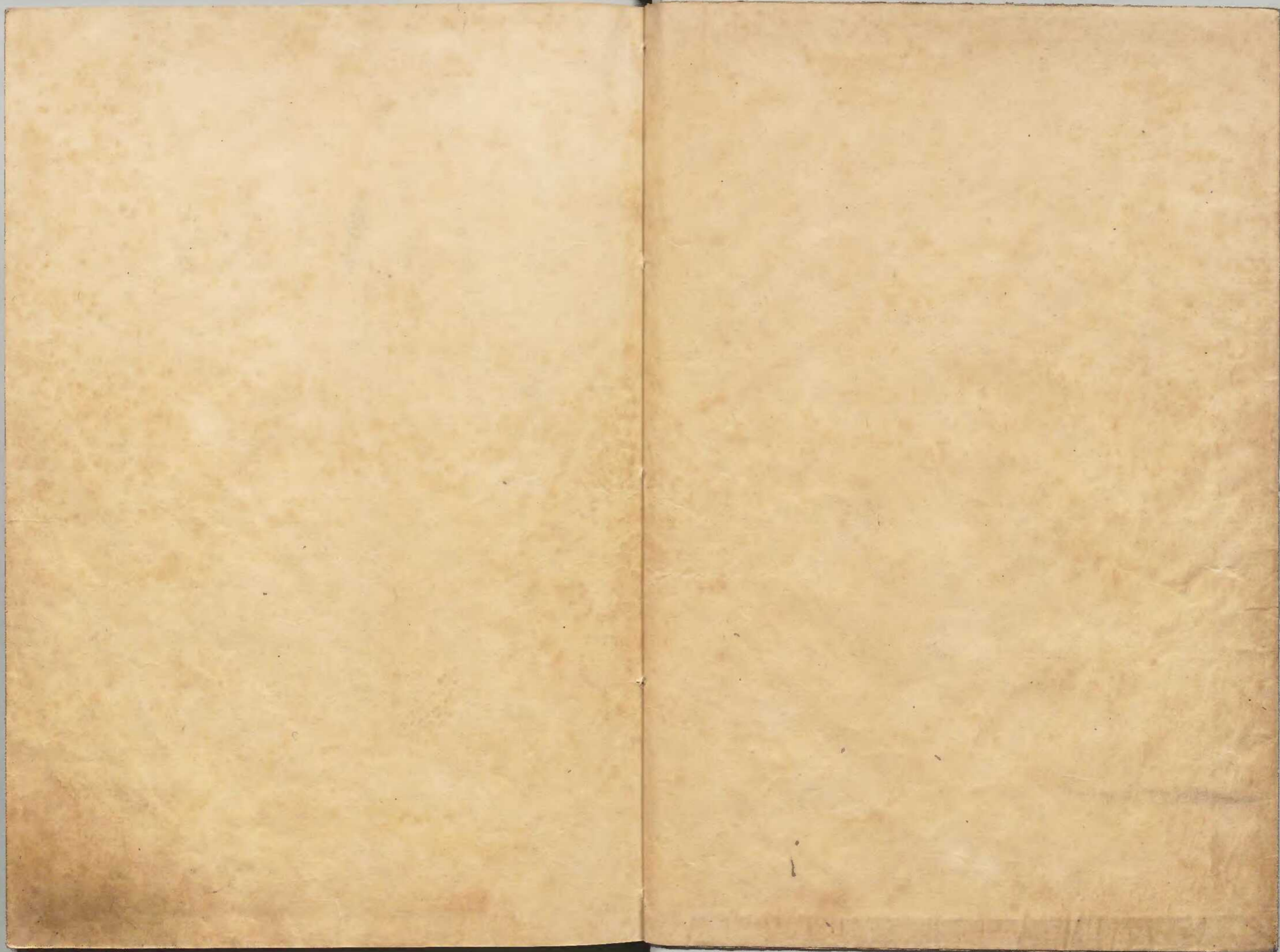
13

寛永諸家

言義家流之内新田流
氏甲九冊之内

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186(13)
函號	76 1





山岩 志質

由良

大嶋

田中

鳥山

寛永諸家系圖傳 くゑん せいしよけいずつでん

清和源氏 せいわげんし

義家流 ぎけりゅう

新田彦流 しんたへんりゅう

山岩 やまが

甲九

淺草文庫

● 義家 ぎけ

八幡太郎 やっぺんたろう

陸奥守 むつみ

鎮守府將軍 ちんしゆふしんぐん

義國 よきくに

式部大史 しきぶのおおし

義重 よきしげ

新田大炊助 あらたのたきのおすけ

義範 よきのり

伊予守 伊豆守 いよのり いくすけ
冠者かんしやと号す

山名の元祖 山名の やまの かんね

義約 よきやく

重國 むねくに

大郎 おおらう

兼明の院の務人 かみあきのいんのおとこ

重村 むねむら

重長 むねなが

又義名と改む またよきなをかへ

義俊 よきとし

政氏 まさうぢ

又義氏と改む またよきうぢをかへ

時氏 ときうぢ

伊豆守

大京大史

坂東より初めく三河一在東京らるる

十六人河内 周播 伯耆 丹波 丹波

兼化 五ヶ所九守儀より

法名 鑑圓道靜 光孝寺と号す他列

み河り

氏清

時氏四男

法圓寺

継子なり

時義

月蓮二年 月野合我 ぬおわく 浄苑
宗鑑寺と号す

時氏六男 伊与守 法名大寺宗均
圓通寺と号す 但列鷹野み河り

時憲

宮内少輔 藤原のち方と時憲
藤原院義満より藤原のち方と時憲

たゞふうきしりこのし藤とてくろく(紋)
 とすつるひいしく氏清係及れとき時
 一族ともかき義満らみ属して軍功と
 へげま守旗の紋氏清と同一くして花
 志かよりらびてい道あつて藤れ葉と
 白く旗のせきもにけくこのせき
 旗のう(紋)あなすとあり氏清らた
 て後但列み入致して代々但列みあす
 法名巨川 大明寺と号し 光月菴ふあす

和列片巻の建康寺本真の碑文亦見
 あり

持考

中流つ持
 但馬 周備 但耆 備前 備後 播磨
 義作 石見 八ヶふれ守後あり
 法名最意道峯 在瑞院と号す
 南禅寺ありあり

教豊

伊予守 法名玄巖 大智院と号す
但列女河少

政豊

右衛門将 宗源院と号す

致豊

彈正少弼 但馬 周備 法名芳心 宗傳 栢風院と号す
あまの守後と号す

孝定

九郎 周列のち渡 孝仙院と号す

豊國

中務大輔 母は細川高國の女なり

代に相違わく因幡に身後より少多の
城に居す時豊國が家老どもはひも
うむしり別み主君とたてて是みつこ
れはよを國則秀吉に属して多取の城
とせぬが守志ももを國つわふ中
と領せしうねら

東照大権現より人々

天三十五年流紫陣の時

大権現但馬れ山名寛濃な〜ひも豊國小

てい〜山名の先祖伊勢守義範八新田義
重れりなりあるときいえ祖我も同
我もんがあり〜せんとの終ふ豊國
けなご 命とあり

長長上年 國原陣の時と抄紙常

島井武秀も八本庄長崎の吉田垣監也

とてい信なす捨利とゆき〜り

伊〜と〜ひ〜但馬の竹田も〜と〜村

た〜と〜城と信〜り國れ〜と支配〜其

後日必七味初と給り是と領知す

大坂陣のとき 伊丹守中多正殿

ハ洲おもむきさるるものなりと云はれ云浦

監おとを國と正殿女備よ何るをさう

何と何うし修ませす

寛永三年十月七日病死七十九歳

法名禪高 東林院と号す 院は妙心寺

小い道河り

豊政

平水藩門

生必周懐

大権現

台座院殿よはし人々

奥列陣圓系陣なびぬ大坂西門陣よ

つぎも志すふい

寛永七年六月廿日死年六十歳 法名

道榮 法雲院と号す

豊義

大正九年

豊長

八戸門

紀伊大納言頼宣卿幼少のとき一あはれ
て書致と云ふ

豊海

豊書

寛永七年

お軍家と云ふ
一

英貞

妙心寺

東林院

豊玄

次郎左衛門

寛永十六年

お軍家と云ふ
一

豊守

同十七年沖書院番と勅じ
表左邊

義照

主殿

生武列

寛永五年

右軍家

義頼

左京亮

生武列

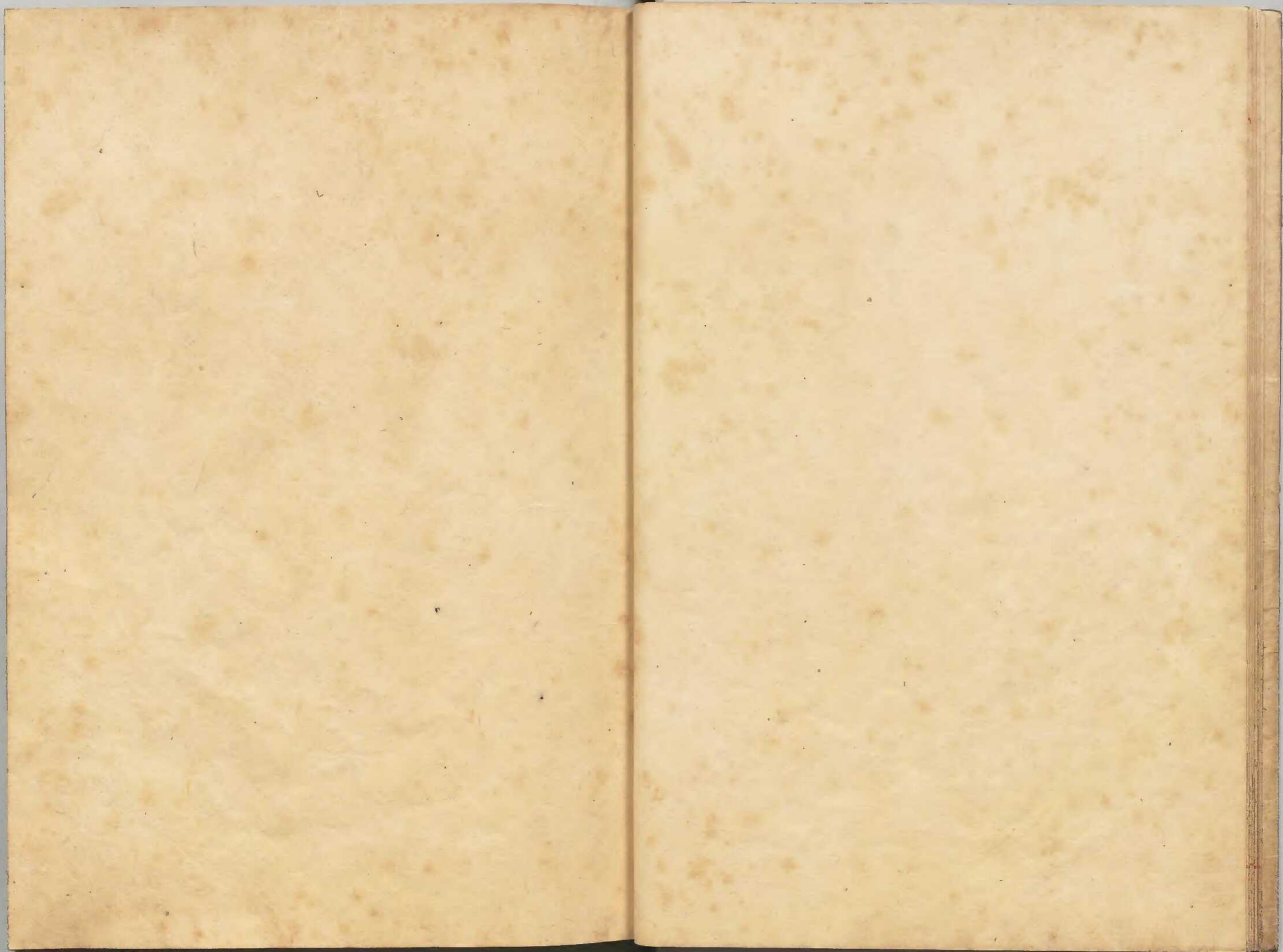
寛永十七年

右軍家

同十八年沖書院番と勅じ

家紋

添紋七葉根藤



志願

家傳小記
山名入唐流なり

義範十二代

● 教考

山名伊豫守

組別み位す

法名玄峯

大智院と号す

改豊

右清門督

宗源院と号す

豊継

肥後 山名と河とありて海を名と称號
とす

源一

源助 海老名号す

筑紫陣北河守

改道

肥後守 南条と号す

伯耆羽衣石の城よおのりて河守 法名道守

改継

源次 海老名と号す 生玉但列

永保らに改継十四歳ありて山名中務宿

入道 平高が許しつゝを後南条伯耆守
元徳 且 属す

天正二年 元徳とてぐみつゝより政徳
伯耆 中 政務と沙汰せしむ政徳

少八歳とて 元徳病死す 二家の男子に
是のついで 秀吉 元徳の伯耆に跡を
兄 清の跡 元清 且つて 元清 孫と

か 且つて 且つて 六 徳士 乞とて 且つて 良
道とて 且つて 且つて 元徳の 家臣 元徳

と 秀吉 且つて 秀吉 元清 と 友 肥後

且つて 且つて 且つて 且つて 且つて 且つて

政徳 且つて 石田 且つて 且つて 且つて 且つて

且つて 且つて 且つて 且つて 且つて 且つて

且つて 且つて 且つて 且つて 且つて 且つて

且つて 且つて

天正三年 八月 秀吉 逝去し 政徳

刑 且つて 且つて 且つて 且つて 且つて 且つて

同七年 且つて 且つて

台漣院殿より

同年上野西縁聖助のちりゆく本助の

栗は郷とたまり

元和九年九月十日病死七十七歳法名

七安

定継

志賀守長清尉

生必尾別

母ハ海色園防守の女

定継元来山名氏より母の氏

より海色と移り志賀より沖家の内

海色は志賀と移り河のち又祖

母の氏用く志賀と河のち

系十五年定継十五歳より

台漣院殿より一してはる父良老の

ころは海色定継は海色より沖俊と

勤む

同年父が死に定継また

字紋相マのまじり 或あハ七葉しち 札は 根ね 源げん

義國

由良

寛治三年八月三日誕生

童名 善賢丸 足利成子大納言

家傳 康和三年三月七日十三歳

よして作門の冠者追討の久おとして

足利太良を友基綱が被りて

基洞もとほらがしどめしめりて是くこれをたす

義重よしむね

新田大炊助にらこ 清名洋西きよなや

母友原基洞ははともがむとめ

頼朝よりともの御ご書状しよじょうとてとりてしり

義通よしとほ

新田秀人にらこ

頼朝よりともの御ご書状しよじょう一通ひととほとてとり

義房よしむら

新田右衛門にらこ

政義まさよし

新田又右衛門にらこ

又中またなかつとてとり

基氏もとぢ

新田了あらた

朝氏あさうぢ

新田左衛門

義貞よしさだ

正四位よしつね

左衛門督さむらゐ

左中納言さなかつなごん

播磨守はりまのかみ

上杉友かみとも

越後えちご

三河みかわ

大工おほく

相模さまみ

氏新寺うぢにん 守介もりすけ

延元二年閏七月二日のちのち 越前えちぜん 必かならず 必かならず 必かならず

江紀時えきとき 又また 三十九三十九 年ねん

義助よしすけ

脇屋わきや 左衛門尉さむらゐ

右衛門尉みぎさむらゐ

刑部卿かむろのきみ

義治よしちか

式部しきぶ 大膳おほのく

貞國 まことくに

新六郎 しんろくろう 信濃守 しんのぶのかみ
法名良次 ほななよし 生國領前 なまくにのりまへ

國磐 くにい

新六郎 しんろくろう 信濃守 しんのぶのかみ
法名宗悦 ほななむねたけ 生國領前 なまくにのりまへ

宗磐 むねい

新六郎 しんろくろう 信濃守 しんのぶのかみ
法名宗忠 ほななむねただ 生國領前 なまくにのりまへ

國經 くにのり

新六郎 しんろくろう 信濃守 しんのぶのかみ
武列須賀合我 ぶれつすけあわが のとこさけは法名宗功 ほななむねたけ

宗磐 むねい

軍切あり

光源院殿之始と裁せしむるにたまたま時義昭

よりこれにけりい言東よりさあ成繁は書と

にまありく軍忠とけりす人これいふと

法名宗得

國盤

中江六郎

信濃守

生母河原

法名良石

天正二年四月輝虎桐生金山より出るとき

國盤所々の城とけりくまもあつた

かへりぬ輝虎とけりるげとき成攻

より感状と國盤みとけり

同十八年小田原没落の後秀吉より常

列のうら牛久の店とすまより少御前

と國盤が母みえりく母と成

かゆかりと後

東照大権現

台徳院殿へはくへんさくまひか

頭名

足利右尾修理亮が舞となめてを家と
はく

貞徳

新六郎 法立位下 お徳の 任濃の
は名良下

大権現

台徳院殿へはくへんさくまひ

え和えの五月七日大坂合戦のとき貞
繁の家人が或は首とり或は赤い
うらまのこころあり

貞名

新六郎 市之清 生必常判 法名

良吉

台徳院殿

お軍家おはしるゝ

頁房

新六郎

生武彦

父の忠告とけりし知りしを

お軍家おはしるゝ

家紋相

大鴻 シムシマ

● 義継 シノヅメ

大鴻秀人
新田大炊助義重
孫里見義俊
次男

氏継 シノヅメ

三郎

義隆よしのぶ

左衛門

氏經うぢのり

左衛門

經隆つとむ

秀人ひでと

經益つとむ

氏助うぢのすけ

通經とほのり

秀人ひでと

光兼みつかね

秀人ひでと

義通よしのぶ

氏助うぢのすけ

光通みつとほ

秀人ひでと

義勝よしかつ

左衛門

系よ

重名しげな 為な 藤丸ふじまる

生なま 承うけ 伊い 豆まめ

家傳いしいしく西さい舞ま丸まる如ごと雅やみりて倭やまと歌うた
このひのいりく一ひと散ちり雪ゆきみつ達たつ一ひとあらととるる
ささくく春はる田た寸すん時じみみここれれ胡こ蝶てつ花か東とうくく
禁いん庭ていの梅うめ花はなみみととままるる是こゝ何なにががややとと初はつ同どう
何なにりりななれれもも西さい舞ま丸まる蝶てつななりりとと初はつ答たふししとと
初はつ使しののいいししくくここああららももああははもも初はつ答たふななりりとと
いいんんももししてて重おもととハハ一ひととと誰たれ一ひとととハハ
一ひと何なにりりももああららももいいふふななららいい
ここのの何なにりりももああららももいいふふななららいい

とと泳いぐぐととななれれももけけかかららとと散ちり感かんああつつてて梅うめ折おとと
とと蝶てつとといいくく家いえ後ごととすすららととれれ初はつ答たふななりりとと
日ひのの丸まるととああららももああららもも梅うめとと蝶てつとといいくく
後ごとといい
今いま葉はららららみみ西さい舞ま丸まる蝶てつななりりとと初はつ答たふななりりとと
海うみななららずずとといいふふももああららももああららもも梅うめとと蝶てつとといいくく
傳つたへへよよめめすす

光宗こうむね

友成の監

生必丹波

長流山跡よりわき一のとうり
月必那の七年と地とわきうの我
死す

光義

雲八

生必丹波

永三子中光義孤獨の力をわき
引よけうーとき必人と地とわき

合戦屋じと紀なり光義十三歳あり

敵一人と射ありす

うれは錯炮けりく本朝より

必めく敵をこぼしとわきうの味方あり

く辟易す一人の敵を錯炮とわき光義

しうふ光義りしとわき相しひつる

手敵と射ありす

或とき敵を樹信かくしとわき光義を樹

本と射つる敵の首よりわき敵を

光義がう勢と感してうれ樹がひ小首と
切くう矢とぬきして光義をもとめとつる
或とこれ合戦は光義志より矢と敵
ち道は敵兵も通ぬ此ころるれ男わ
けりぬれちとるぞと光義とつんと
寸光義親の矢とぬき出して件の敵と
討らふ寸光義が討獲にものせぬと
うふ何るときは後討ぬめり
東胆大槍獲はつひやうせなまうとまとい事

と言と寸

七井隼人 系美流必山縣村母友山城守
飛城とせしつととき城申より根小屋
隼人小房して本戸とあつて敵と村
志うとく又名谷川甚き時、純とて本
戸とひくさせめ入めり敵はあま城中
一川より光義首一級と切く火と町に
ぬるかひとく志うりく同は約執捕は光

新在山城也と名井隼人と防我のとき
光義他所より行りてとてよも軍兵におま
てゆり光義の同友若人腰首級とゆ
ゆりとて光義よりゆりて敵軍とて十
五所と防らるべしとよとゆりて光
義馬とよとゆりて敵之騎と村おし
首級とゆりてゆり
名井隼人同必か治田村佐友紀伊守か
城とせむ敵軍中よりゆりてねたふり

光義流下よあわゆる肥田金蕃とゆり
金蕃ハ末田の城よりゆりてゆりて
あわゆるか治田よりゆり

名井隼人浪人と成る員流あしと
後光義信長も届してら大おしゆり
え能えの婿川合我れとて信長れ余
又依る光義先づけして敵敵人と
あわゆる信長とて感す

同二年信長に列ぬゆりてゆりて

浅井の軍士地方に下りて守
信長柴田修理の命じて志願して
しつとせし先義信長に下知れりて栗
田におくつりてとす川をさして海
天正元年越前の軍士に別れし
て川をさしてとす信長に
馬とせし歌のうらとつ先義
陣におくんで歌を討おとす信長
と成感す

同二年七月合戦なりびと越前の一揆
正治のとき先義戦切なり
同十年信長月殺のとき先義安志に
城よりなりとすも陣中此士卒騒動
で城よりしつとせしとす
川を通地はよにげら先義なりびと
信長は地のあり軍におもよむ
とすとす河次あり一揆起す先義ら一
とすとす大場と討しつとせし

かたう

その後秀吉よ属してら大おとなり成時

秀次れ命しうもく矢十筋八坂れ塔の

此重れ忘へ射し後人よりれら鞍とさ

志あんがあ件の矢と塔内よあし

香名五年と秋系務と必治として

大権現下野あ小山よ清が陣のとき光義

信守寸石田に成と方少く福及のつけ

あつあつり毒ふとご方よとく徳海あこと

るこれ命何りといども光義あ年

大権現れあ過しうくらゆ書あしとわり守

信守よ列を命され言として開衆

おもひく之成伏誅の後大坂ああわく志

壺なびぬ大徳こもよとあはすも後

大権現は多うハ光義あ書あしとわり守

て小山より関あめ信守よりうれ志志と

感一かり守れしゆあくを後あ印押の
城あ飛とへこれう一甲多上野あ 上さこ

びみ全銀無腰等と下ころ
駿府沖城造畢の後光義駿府奉
向のとき

大権現光義と沖城又百して信長ハ
恒矢狭弓等としく名く取らる
あハ言ととる
沖あましくととる射獲あびみ光義
ひの戦つたつて
享長九年八月廿六日死去 九十七歳

法名道林

光成

次右衛門 一名光安 生西流
信長秀吉おけく教養軍切あり
関原陣のとき

大権現おととひまうて信長
享長十三の十一月十六日死去 五十歳
法名了伯

光親みつちか

孫二郎 一名光長みつなが 生母同前

秀吉ひでよし 又また 光成みつなり と同時同時 又また

父光成みつなり と同時同時 又また

大権現おほごんげん 又また 光成みつなり の後のち 志保しほ とと 光成みつなり

光成みつなり 死し 其その の後のち 志保しほ とと 光成みつなり

大坂おおさか 夏の陣なつめのじん 一騎ひとかば とと 同どう

枚方まいかた 又また 志保しほ 又また

光俊みつとむ

寛永かんえい 六年六年 六月六月 乙未えいび 死し 年ねん 八八 歳さい

八はち 丁ぢょう 谷や 田でん 村むら

光勝みつかつ

茂しげ 隆たか 村むら

光好みつこう

白馬しらかま

義孝

久吉

幼名ハ光豊

生母武彦

父光親死去の後義豊を幼くして養て

將軍家より侍りて

寛永十四年十月十七日死去十五歳

法名日性

光政

茂隆

生母流河

光政弱少の時

栗山氏とけいこ

法外賀茂幼より侍りて同家の侍人武市

本良兵衛同右京八百餘人より

光政が居城とせしむるとき光政欲人

と封さして城とせしむるとき我孫村

と封さす

同家の侍人

茂隆新を森武彦と稱

我のとき光政新を以て出

と詔告硯削れ橋より

う一様めくこ道とせく

織田信長が所領伊丹の城とせしむる事

光政の友と属し光政が同友原金吾

と一番の城中一系入光政首級とせしむ

信州堂洞におわく女友金吾と妻武

と合戦のとき光政金吾が継行りく

歌と松栢新助と地と何なり

越後系保作と信奥も人合戦乃中

信長信奥もか加勢として所友新也

とつらつら系保が先陣川田をあた

を討つる新也が陣下保金吾

せし割也と小堀めく大敵めむ

光政新也と属し系金吾と何なり

一番の地と何せし首級とせしむ

又所友と川田と合戦の時光政敵と

斬りて首級とせしむ

信長生害れと織田三七信者母所也

とき光政も秀吉に属して首級とゆふ
秀吉に属し合戦のとき光政も秀吉
に属し志津嶽にぬきやめく光政も
り石江小浜御安喜寺に格と助三人一組の
らゆき一巻に絶つ河津
以後秀吉に幕下り追討す
秀吉薩摩陣のとき終末後を
一揆の長とすまじく事とて又急
り光政にゆき一揆と追拂てゆき

たゞ

秀吉薩摩陣のとき追討す
して合戦の招おとたまふ
秀吉朝鮮征伐のとき使節として
鮮へ渡海し海朝してか後なる物嘉明
か軍初と秀吉にゆき

秀吉五年関原陣のとき

東照大権現に志くごひまら

光義死後志くごひまら

大坂を度れば陣は一族と門のく投方
此津番と勤む

大権現薨津の故

台徳院殿

將軍家より侍人より

台徳院殿御賜とすふとき全報告願

お祈す所い御馬とすふも

こと何れ

元和八年八月十日死す卒葉法名

日勇

光盛

大坂 生島山城

大坂を度れば陣と光盛も道徳者

忠後より命じて軍より勤む

八月七日合戦のとき勅告致す天皇

守意と出陣す光盛先陣とわけて

陣と何れせむとすふも

多勢なるゆへにけりぬ死を承る水正
三成のころより又河内へ移りて居りぬ
光盛二十七年 法名宗伯

義唯

義若儲 生母山城

享和十八年

大権現と名湯一寺あり

右陸院殿へけりて

大坂あ夜の古陣より故方北書勤

元和八年先政死すの後は江と

清

後府津城矣これ後津殿古書信

れとて義唯 修めしむるあり

勤心

寛永十七年義唯未地と勤して

濃河内と仰りて是義を承りぬ

此地より義を承りてて家とす

子なきありて此地より承りて

いとも祖父光義の勤功ありて
なふ所の比なり友と又かくれし

義近

共吉

生國武彦

寛永十二年初め

お軍家とぬーす

義保

七務

生國曰前

義當

平八郎

生國孫流

寛永三年

お軍家又けりて

同十年米地の清加増とねりす

義益

三臣

生國曰前

寛永三年

お軍家又けりて

開承陣れ少なき神あり

大権現とぬーなる

光義死すの後の遺跡と云ふは

大坂より度れ陣れ光俊光親光政と

同じく扱方の清書と勤心

大権現薨御の後

台徳院殿みはくく

元和四年七月十日死す年八葉清名

体安

義治

久世清

生母回お

台徳院殿みはくく

大坂より度れ陣れと記一旅と云く

扱方みは番守

光俊死すの後の遺跡と云ふ

台徳院殿薨御の後

將軍ありはくく

寛永十八年二月十三日死去廿九歳
法名日量

義雄

森八郎

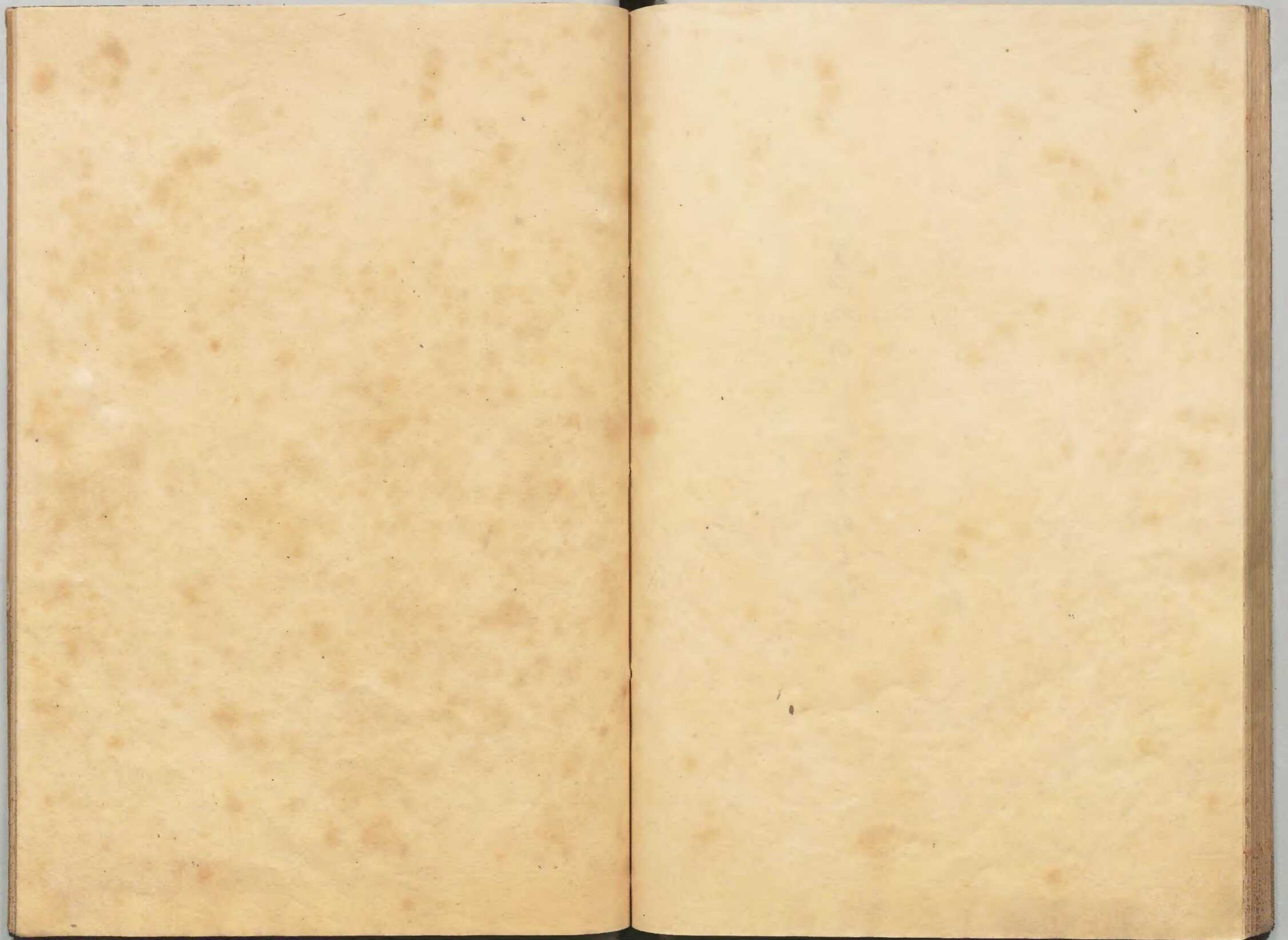
生母武義

寛永九子

お軍 あまけい なまろ

日十九年父が老幼と給る

家紋梅の折枝三連の二羽蝶



義綱

義次郎

生國同家

系

義次郎
清康君
生國三河

田中

廣忠^{ひろちゆう} 御代^{ごだい}少

東正^{とうしやう} 大権現^{おほいけんげん} 又^{また} 此^{こゝ} 人^{ひと} 之^の 事^{こと} 也^{なり}

永保^{えいほ} 六^む 乙^の 三^{さん} 列^{りつ} 一^{いつ} 句^く 宗^{そう} 一^{いつ} 揆^{けん} 輝^き 起^{おこ} の 時^{とき}

仰^{おほ} 見^み 之^の 事^{こと} 濟^{すけ} 少^{すく} 和^わ 田^{でん} 又^{また} 以^{もつ} 之^の 後^{のち}

以^{もつ} 地^ち 之^の 形^{かたち} 録^{ろく} 寸^{すん}

義忠^{ぎちゆう}

義次^{ぎじ} 郎^{らう} 五^ご 良^{らう} 右^う 衛^ゑ 門^{もん} 生^{せい} 必^{ひつ} 田^{でん} 家^け

大^{おほ} 権^{けん} 現^{げん} 又^{また} 此^{こゝ} 人^{ひと} 之^の 事^{こと} 也^{なり}

元和^{げんわ} 元^{げん} 子^し 五^ご 月^{げつ} 十^{じゅう} 下^げ 後^{のち} 府^ふ 又^{また} 此^{こゝ} 人^{ひと} 之^の 事^{こと} 也^{なり}

卒^{すつ} 之^の 案^{あん}

忠緒^{ちゆうしゆ}

忠^{ちゆう} 助^{すけ} 市^{いち} 良^{らう} 右^う 衛^ゑ 門^{もん} 生^{せい} 必^{ひつ} 田^{でん} 家^け

大^{おほ} 権^{けん} 現^{げん}

台^{たい} 酒^{しゆ} 院^{いん} 殿^{でん}

將軍^{せんげん} 家^け 又^{また} 此^{こゝ} 人^{ひと} 之^の 事^{こと} 也^{なり}

寛永^{かんえい} 九^く 乙^の 八^{はち} 月^{げつ} 仰^{おほ} 見^み 之^の 事^{こと} 濟^{すけ} 少^{すく} 和^わ 田^{でん} 又^{また} 以^{もつ} 之^の 後^{のち}

継の頭と云ふ

同年十二月

鉤命と云ふて布衣と云

寸

同十九年沖鋒炮と云ふ力歩約同心と云ふ

義次

五郎右衛門

生太武彦

大権現

台座院殿

將軍家と云ふは

長正

松平十右衛門 生太同前

外継父松平右衛門を云ふは

まゝなりゆゑに松平の称号と云

將軍家と云ふは

松平

小十郎 生玉河の

寛永十六の七月廿三日

お軍家とある一書

結平 ひら

三之丞

生玉河の

家紋 いん

木尻 きし

● 素

山

与七郎 法名了深 生必三列
 和平基右郎 義喜女 法名

精後

丹波

生必同家

三家れとき父与七郎死去ぬし
精後其年のとき也家も少洞意也
号寸うわら累倍して西之河東條
信して時

東照大権現と名湯一
天正十八年国东沙入ぬのとき
佐渡守与信 信しうけく深みあて
精後其屋敷したしうふまもぬ
あつてとてと辞

名長おのり河原沙陣のときと三列吉田
おわく永井 右近お丈養志あく
大権現と名しちあすおつら信
同お子 信あつて三列ぬわく津代
友しうもにすつら
精後嗣ふたりさぬあつて姪中助精明
と屋一なりく是代とつし心

精明

牛之助

生五郎

大権現

台徳院殿

將軍家より侍人等より列せられたる御代友

と仰つてけり

寛永十五年沙切米と御代守

日十八年八月二日

竹代若沖延生精的御代友

竹代若と御代友

精親

指務

生五郎

寛永十一年二月廿日御代友

將軍家と御代友

家紋丸の内小鳩齋草

